# ダルマパーラ日記の資料的価値と異本成立の過程に関する考察

A Note on Dharmapala Diary, the Development of its Alternative Versions and its Documentary Value

赤 井 敏 夫 Toshio Akai

#### Abstract

This paper is to study textually the diary written by a Ceylonese Buddhist reformist Anagarika Dharmapala (1864-1933) from 1889 to 1932, and to establish its documentary value by examining the differences between its alternative versions. My research in the National Archive of Sri Lanka and the Anagarika Dharmapala Trust in Colombo revealed that several editions were produced from the original handwritten diary, now stored in the National Archive. Two different photographed copies were made; one is a film-copied microfilm in the National Archive, and the other is a digitally photographed compilation the Trust keeps, in which the volumes of several years are missing. To fill in them, the Trust has typewritten volumes, a private edition made in 1960s by the order of the Trust Board. Another copy of this is held in the National Archive. In both cases, many volumes, at least of nine years, are missing. Serious errors taken place when the original handwritten diaries were transcribed can be found, mainly due to the deterioration of the original manuscript. The errors are relatively few in the early years, and this made me suspect that the typewritten volumes of those years were created in use of an earlier transcription, made for the excerpted Dharmapala Diary published indeterminately from 1943 in The Journal of Maha Bodhi Society. The existence of this earlier transcription has not been confirmed so far, but inferable enough is that the involvement of Devapriya Valasinha into the editorship increased the correctness in the transcribing procedure, as he was Dharmapala's private secretary who personally knew him and was familiar with his handwriting. My study reveals that six alternative versions of the Dharmapala Diary including an assuming transcribed manuscript made as a material for the excerpted Dairy were produced. All complement with each other, but the several volumes, including the significant years for Dharmapala's life such as 1890 and 1912, are still missing. In order to use the Dharmapala Diary for academic purpose, an optical correction of the digital copy is necessary, and the establishment of a variorum, comparing each version and finalizing the complicated differences between them, should be written as soon as possible.

Keywords: Dharmapala, text study, Maha Bodhi Society, Ceylon, India

### 1. はじめに

セイロン (現スリランカ) 出身の Anagarika Dharmapala (1864~1933) (以下、ダルマパーラ) は 戦前に4度にわたる訪日を果たし、独立前のインドと日本との文化交流に多大の貢献を成した人物 である。ダルマパーラは在家仏教者として英領インドの仏教復興運動に尽力したことから、日本に おけるかれの事績は戦前の仏教関係邦文資料では比較的細部にわたって記録されている。一方イン ド側の資料としてはダルマパーラ自身が創設した Maha Bodhi Society (以下、大菩提会) の機関誌 を中心に本人が執筆した英文記事が相当数存在するが、訪日時に限定して考えると、邦文資料に共 時的に対応する記録で公刊されたものの数は限定されている。しかしダルマパーラは生涯にわたっ て英文日記を記していたことが知られており、これを参照するならば、邦文資料の精度やそこにお ける文化的バイアスの介在を確認することができるはずである。日記の原本はスリランカ国立資料 館に収蔵されていることは判明していたが、当然のことながら貴重文献あつかいであり、もとより 短期間の調査で全貌を把握することは不可能な種類な資料である。ところが近年になって、ダルマ パーラの業績を保存研究する Anagarika Dharmapala Trust (以下、ダルマパーラ財団) が日記原本 の電子複写を所蔵していることが判明した1)。そこで筆者は、岡崎秀紀を共同研究者として、2015 年度神戸学院大学人文学部研究推進費を受けて、コロンボのダルマパーラ財団でダルマパーラ日記 の電子複写の調査を行うこととした。本論文の目的は、この調査によって得られた知見の中から、 手書原本から派生した異本の成立過程を考察することによって、現段階で研究者がアクセス可能な 手書原本、これをタイプ打ちで起こした私家版、部分的に機関誌で刊行されたものの三者の関係を 書誌学的見地から明らかにし、ダルマパーラ日記の資料的価値を検討しようとするものである。

## 2. 調査の過程

ダルマパーラ日記の調査は、以下の研究機関において、そこに付すような日程で行った。

- ① ダルマパーラ財団 (スリランカ、コロンボ) 2015 年 8 月 2~5 日、ダルマパーラ日記電子複写 版およびタイプライタ版の調査
- ② スリランカ国立資料館(スリランカ、コロンボ)2015年8月4日、ダルマパーラ日記手書原本の調査
- ③ スリランカ大菩提会会長 Banagala Upatissa (以下、バーナガラ・ウパティッサ) 師邸 (スリランカ、コロンボ) 2015 年 8 月 5 日、ダルマパーラ遺品の調査
- ④ 神智学協会本部(インド、チェンナイ)2015 年 8 月 7 日、大菩提会機関誌 The Journal of Maha Bodhi Society (以下、大菩提会機関誌) の調査

<sup>1)</sup> ケンパーは日記原本の所在は不明としているが(Kemper, 439)国立資料館館長 Saroja Wethesinghe 博士よりコロンボ神智学協会から国立資料館へ寄贈されたとの証言を得た(2015 年 8 月 4 日)ことから、原本が同館に所蔵されていることは確実と思われる。

なお上述のようにダルマパーラの日記は 1889 年から死の直前の 1932 年に至るまで長期間に及んでおり、日印文化交流のみならずインド独立前後の仏教復興、スリランカ独立に至るシンハラ民族主義など、ダルマパーラが生涯を賭した革新的運動の多岐に渡る異相をほぼ全面的にカバーしているため、伝記的にも南アジア近代史のうえでも一級品の資料といえる。例えば近年これを総合的に参照しようとする Steven Kemper の研究(以下、ケンパー)などが刊行されているが<sup>22</sup>、筆者の調査には日程的な制限があったため、その対象をダルマパーラの 4 回の訪日のうち 1~3 回、すなわち 1889、1893、1902 年のものを中心とした。

#### 3. 日記原本の様態

スリランカ国立資料館で日記原本のマイクロフィルムを数巻閲覧しダルマパーラ財団所蔵の電子複写版と比較検証したところ、特に大きな異同のないことが確認できた。これらのマイクロフィルムが国立資料館に収蔵されたのは1999年8月であることから、財団所蔵の電子複写版はマイクロフィルムからのデュープである可能性をまず想定しなければならない。これは財団館長 Nihal Weerasinghe (以下、ニハル)氏の原本よりスキャンしたものを収めたとの証言とは食い違うが、マイクロフィルムや電子複写版から見た原本の質的劣化状態から考えてスキャニングは難しい状態にあるのではないかと想像せざるを得ない。しかしながら、マイクロフィルムが作られた後に、財団の要請を受けて改めて原本の写真撮影が行われた可能性も棄てられない。電子複写版がカラーであることなど複数の理由から考えて現段階では後者の仮説の妥当性が高いのではないかと判断しているが、そうであるならば手書原本の複写に関してもマイクロフィルム版と電子複写版の2種類の異本の存在を想定する必要がある。

なお財団所蔵の電子複写版は 1902 年までに限定して見ても、1892~1899 年、1901~1902 年の欠巻がある。これは後の述べるようにタイプ打ちにして起こした版が存在し、欠損する年代の過半がこれによって可読状態となっているからであると考えてよい。財団の目的は原資料を保存するのではなく、閲覧を希望する者に日記を公開するところにあると考えればこれは納得できる③。しかし1890 年のようにマイクロフィルム版、電子複写版、タイプライタ版のいずれからも欠損している巻があり、これは原本が散逸したか、あるいはもともと日記が記されなかった可能性がある④。

<sup>2)</sup> Steven Kemper, Rescued from the Nation, Anagarika Dharmapala and the Buddhist World, University of Chicago Press, 2015. ダルマパーラ日記に関する他の先行研究としては Roberts, Michael. "Himself and Project. A Serial Autobiography. Our Journey with a Zealot, Anagarika Dharmapala." Social Analysis 44, no. 1 (2000): 113-41 があるが未見である。

<sup>3)</sup> ニハル氏によると2つのバージョンの収蔵過程はさらに複雑で、本来タイプライタ版が全巻所蔵されていたものが、幾つかの巻が盗難にあったため、それを埋めるために国立資料館に依頼して電子複写を取り寄せたということである。つまりそれ以前は手書原本は国立資料館に、タイプライタ版がダルマパーラ財団にと役割分担がなされていた可能性がある。

<sup>4)</sup> 大菩提会機関誌に掲載された抄録日誌の編者デーヴァプリヤーは 1890 年の日記が「部分的に散逸した」と述べていることから、日記そのものは存在していた可能性が高い。Devapriya Valasinha, "Note to Dairy Leaves of the Late Ven. Anagarika Dharmapala," *The Journal of the Maha Bodhi Society*, Vol. 59, May-June, 1944, 8.

マイクロフィルム版と電子複写版の双方から推測する限りでは、マイクロフィルム作成のために撮影が行われた時点(マイクロフィルムが国立資料館に納品された期日から逆算して1999年よりわずかに前と考えられる)で日記原本の劣化はかなり進んでいたものと思われる。多くのページでインクのかすれやシミ、裏写りのため判読が困難となっている。これは光学処理によって可読性を高めることが出来る可能性があるが、幾つかのページに見られる虫食いは致命的である。日記原本の劣化は近年となって起ったものではなく、少なくともタイプ打ちによる文字起こしが行われたとケンパーが措定する1960年代(Kemper, 439)より更に以前の時代、恐らく1940年代にすでに始まっていたと想定するに足る根拠があるが、この点に関しては後段で論ずる。ダルマパーラの死後、日記原本が国立資料館に収蔵されるまでの過程に関してはいまだ不明な点が多いが、コロンボ神智学協会以前に大菩提会にあった可能性がある(その根拠は後に述べる)。高温多湿の環境で保存にしかるべき配慮が払われていなかったと想定するしかないが、その要因として日記原本の所有権に変遷があったためではないかとの推測が成り立つ。

またマイクロフィルム版と電子複写版の双方から判断して、筆者が検証した 1902 年までの日記はすべて、英国製の日記帳に記されている。これらは当時ロンドンで市販されていた一般的な日記帳であり、英領セイロンでも容易に入手できたのであろう。日記の1頁は四等分されており、月の冒頭のページなら1日から4日まで日付が打たれて4日分が記入できるようになっている。ダルマパーラはブラックのインクを用いてここに書き込んでいる<sup>5)</sup>。日によっては空白を残すように短いものもあれば日の区切りを横溢して次の日まで書き込みがなされている場合もあるが、基本的には四等分された区切り内に収まるよう書かれてある。

# 4. ダルマパーラ財団所蔵の手書き版とタイプライタ版

ダルマパーラ財団所蔵には前述のようにダルマパーラ日記の手書原本の電子複写版がある。これは 3 枚の CD に保存されているが(ここでは CD1~3 と呼ぶ)前述のように全巻揃いではなく多くの欠巻がある。3 枚の CD には編年順に日記が保存されているとは限らず、また 1917 年や 1919 年のように複数の CD に同一の巻が保存されている例もあり、また CD3 は 1891 年と 1922 年のみしか収蔵しないなど収める巻数は一定せず、電子複写版が成立するにあたってかなり複雑な経緯があったことを推測させる。なお CD1 の表書きには 1912 年と 1916 年を収めると記されているが、これらは欠巻であり他の CD にも収蔵されていない(図 1)。

一方ダルマパーラ財団では手書原本電子複写版の欠巻を埋めるように原本から文字起こししてタイプ打ちした版を収蔵している。これはダルマパーラ財団が1960年代に作成した私家版である。しかし手書き版とタイプライタ版は完全に補完し合っているわけではなく、1895年、1897~8年、1914年、1923年、1928~31年の欠本がある。基本的には1年分の日記を1巻にまとめて装丁して

<sup>5)</sup> 例えば 1889 年の来日時のように旅先で新たなインクを補充したなどの特殊な環境で書かれたものはその限りではない。1889 年にはブルーブラックのインクが用いられている。

あるが、1910年と1911年のみは合本されている。理由は不明だが、財団が所蔵しない巻に関しても更に合本がある可能性がある(表1)。

タイプライタ版の成立に関しては不分明な点が多い。タイプ化がダルマパーラ財団主導で行われた事業であることはほぼ間違いないと思われるが、筆者が聞き取り調査を行った財団関係者の中で事業が発想された経緯を記憶している者はいなかった。ケンパーはタイプ化が 1961 年に始まり 1 巻を除いてほぼ 1 年以内に終ったと述べているが(Kemper, 439)これは一例をあげるならタイプライタ版 1893 年の巻の 2 頁目に記されている "Dairy of the Late Anagarika Dharmapala 1893、 Typed from the Original Diary by Order of the Board of Management, Anagarika Dharmapala Trust, at their Meeting on  $15^{\text{th}}$  May, 1961"といった但し書きから推察したものに相違なく、明白な根拠があるものとは思えない。タイプライタ版の成立もそれほど単純なものではないと考えられるからである。この点に関しては後述する。

財団所蔵のタイプライタ版は大別して2種類がある。ひとつは黄の、今ひとつは黒のバインダで 装丁されており、明らかに後者は前者よりも時代的に新しい(図 2)。恐らく 1960 年代に手書日記 原本をタイプ打ちして私家版が作られた時点での原型を留めているのが黄表紙本であり、そのうち 何らかの理由で欠本したか劣化したかのため再度タイプ打ちしたものが黒表紙本であるに違いない。 黒表紙本の中には例えば 1898 年の巻のように第2頁にリタイプしたことを明記しているものもあ るが、すべてがそう記しているのではない。この推測が正しければオリジナルのタイプライタ版 (黄表紙本) はブルーのリボンで印字されており、リタイプ版(黒表紙本)のリボンはブラックで あったと区別することが可能である。黄表紙本のブルーの印字は経年劣化が激しく非常に判読しに くい。また巻によっては数頁にわたって虫食いがあって判読不可能な部分があるものも少なくない。 ダルマパーラ日記を学術資料として用いる場合に最大の問題となるのは、手書原本とタイプライ 夕版の間に明らかな異同があると推測されることである。これは財団所蔵のうち両バージョンが存 在する数少ない年のひとつである 1889 年の巻を詳細に検討すれば理解できる。本年のタイプライ タ版はブラックのリボンで印字された黒表紙本であり、60年代以降にリタイプされたことが明記 されている巻であり、伝記的に言うならダルマパーラが神智学協会会長オ―ルコット大佐に随行し て最初の訪日を果たした年にあたる。すでにケンパーはタイピストによる明らかな誤読もしくはミ スタイプから来る転写の過ちが多数介在することを指摘しているが(Kemper, 441-2)この巻に限 定して言えば、例えば日本語の固有名詞の誤読(「神戸」を Kohe と表記する等)を除けば概ね文 字起こしの精度は高い(その理由に関しては後段で論ずる)。それでいてなお、以下のような無視 できない書誌学的問題点がある。

- ① 日記原本で判読不能であったと思われる部分をブランクとしたり、場合によっては削除しており、注記がなく、その方法も一定していない
- ② 日記の中でダルマパーラ本人が斜線で削除した部分を注記することなくタイプ起こしから除いている (例えば4月11日の冒頭など)

現状では手書原本の経年劣化が激しいためこれを学術資料として利用することは容易ではないが、 光学処理などによって電子複写版の可読性を高めることが可能だとするなら、手書原本とタイプラ イタ版との異同に関して書誌学的原則にもとづいて学術的校定を行う必要があることは明らかである。

尚、タイプ打ち私家版が何部作られたかは不明である。現在判明している限りではスリランカ国内には 2 部が国立文書館とダルマパーラ財団に所蔵されていることが判明しているが、これとは別にインドをふくめて他の大菩提会支部に所蔵されている可能性はある。今後、蔵書数が充実しているとされるサルナートとカルカッタの大菩提会支部などを調査する必要がある。しかし所在が判明している 2 部に限定しても完本ではなく、ケンパーは 9 年分の欠本があることを報告している (Kemper, 442) $^{6}$ )。ケンパーは国立文書館所蔵のものを対象に調査したと思われるが、かれが欠本を指摘している 9 巻のうち 1910 年分は前述のように 1911 年分と合本されてダルマパーラ財団には収蔵されている。私家版の配布に関しても何らかの複雑な経緯があったのではないかと推測される。

またタイプライタ版としては存在するが日記ではない巻が介在していることも付言しておかねばならない。1892年の巻は他のものと同種の日記帳に書かれてはいるが一切日記の体裁をなしておらず、講演草稿の下書きや種々雑多なメモを乱雑に書きつけたもので、執筆の順序は時系列的になっていると思われるが、相互には何らの関係もない。国立文書館でマイクロフィルム版を参照したが、他巻と同様手書原本とタイプライタ版との間に些少の異同はあるものの(例えば原本にある図やスケッチはタイプライタ版では除かれている)原本を忠実に文字起こししたものであることは確認済みである。時間的制約のため全巻を確認してはいないが、先行研究を見る限りこの種の例外は1892年にのみ該当するようである。

# 5. 大菩提会機関誌掲載のダルマパーラ日記

ダルマパーラ日記を学術資料として活用するにあたって考慮する必要があるものとして、手書原本、タイプライタ版以外に大菩提会機関誌に掲載されたダルマパーラ日記の抜粋再録 "Dairy Leaves of the Late Ven. Dharmapala" (以下、抄録日記)がある $^{7}$ 。これはダルマパーラ没後十年を記念して 1944 年より連載が開始されている。編者の Devapriya Valasinha (以下、デーヴァプリヤー)は連載に当って、この抄録日記がダルマパーラの思想と人となりを明らかにするのみならず、かれの多岐にわたる交友関係を知るにも重要な資料となりうることを強調している $^{80}$ 。抄録日記は 1889 年 6 月 17 日、すなわちダルマパーラが第 1 回訪日からセイロンへ帰国した日から始まっている。掲載はこれ以降不定期に続き(毎号掲載されるとは限らないし掲載される日記の量もまちまち

<sup>6)</sup> ケンパーはダルマパーラのカルカッタにおける活動においてもっとも重要な 1916~17 年の日記が発見できないことの理由として手書原本が植民地政府によって没収された可能性を示唆しているが (Kemper, 442) 1917 年の巻は手書原本電子複写版がダルマパーラ財団に所蔵されている。但し2月分は欠損している。

<sup>7)</sup> タイトルは第1回掲載時のみ "Dairy Leaves of the Late Ven. Anagarika(Sri Devamitta)Dharmapala" となっている。

<sup>8)</sup> Devapriya Valasinha, "Note to Dairy Leaves of the Late Ven. Anagarika (Sri Devamitta) Dharmapala," *The Journal of the Maha Bodhi Society*, Vol. 57, January–February, 1944, 3.

である)1946年1・2月号以降のいずれかの時点で連載は中断され、1950年3・4月号より1893年元旦の日記から掲載が再開されている。この号では編者が「ここで述べたくないような理由から掲載中断のやむなきに至った」と書いていることからして手書原本の所有権をめぐって何らかのトラブルのあったことを推測させる $^{9}$ 。再開された連載が当初の企画通りダルマパーラの死まで続いたのか否かも現段階では不明である $^{10}$ 。

この抄録日記から無作為にサンプリングして該当箇所を手書原本、タイプライタ版と比較検討し てみると、かなり忠実に原本から文字起こしを行っていることが判明する。当然のことながら抄録 日記は原本のすべてを再録しているのではなく、編者の判断で必要とされる箇所を部分的に抽出し ている。原本にあっても再録されていない日もあれば、同一日の記述の中でも大幅に除かれている 例も多い。注目すべきなのは、タイプライタ版で原本の文字が読み取れずブランクとなったり省略 されている部分は例外なく抄録日記に再録されていない点である。ここから以下のような仮説が成 り立つ。すなわちタイプライタによる文字起こしは、そのすべてがケンパーが推測するように 60 年代になって着手された作業ではなく、それよりも早く 40 年代に抄録日記の連載にそなえて部分 的に行われていたのではないだろうか。この仮説は 1889 年から 1893 年あたりに至る初期日記の文 字起こしに限って、ケンパーの指摘するような不用意な転写の誤りが少ない理由を説明するのに有 効である。抄録日記の編者デーヴァプリヤーは、ダルマパーラの一族へワヴィタルネ家には血縁的 には連ならないものの、幼少時にヘワヴィタルネ家に養子として迎え入れられ、長らく個人秘書と してダルマパーラに仕えたのち、ダルマパーラ晩年に大菩提会の運営を委ねられた人物である (Kemper, 28)<sup>11)</sup>。こうした伝記的背景を考慮すれば、デーヴァプリヤーがダルマパーラの直筆に も親しんでおり、時に判読の困難な原本の手書き文字(ダルマパーラの書体は場合によって変化が 大きく、特にシンハラ文字を模したと思われるアルファベットは極めて判読しづらい)を解読する には最適の人材であったと容易に想像がつくからである。この文字起こしは日記全体に及ぶもので はなく(構想としてはあったかもしれないが)抄録日記掲載の対象となる初期の部分に限定されて いただろう。そして60年代のタイプ打ちは部分的にこの時の文字起こしを利用した可能性が高い。 そのため、その部分のみ転写の精度が高く、60年代になって転写が行われた残余の部分に関して は、デーヴァプリヤーのようなダルマパーラの事績にも手書き書体についても知悉した人物が直接 関与しなかったためケンパーの指摘するような誤記が頻出するようになったのではないかと考えら れる。また、恐らく最初の文字起こしが行われた時点では日記原本はコロンボの大菩提会にあり、 その後神智学協会に移管されたのではないかとの推測が成り立つのである。

<sup>9)</sup> Devapriya Valasinha, "Note to Dairy Leaves of the Late Ven. Anagarika Dharmapala," *The Journal of the Maha Bodhi Society*, Vol. 94, March-April, 1950, 68.

<sup>10)</sup> 大菩提会機関誌は多くの文書館や研究機関が所蔵しているが完本のかたちでの所蔵は極めて少なく大英 図書館にもない。今回の調査でサルナートとカルカッタの大菩提会に完本があるとの証言を、スリラン カ大菩提会会長バーナガラ・ウパティッサ師より得た(2015年8月5日)。

<sup>11)</sup> デーヴァプリヤーは田中智学が創設した在家仏教者団体である国柱会の招聘に応じて 1954 年に来日したことが判明している。佐藤哲朗『大アジア思想活劇、仏教が結んだもうひとつの近代史』ON-BOOK (2006 年)、359 頁。

## 6. 異本とその成立過程

以上のような考察から、ダルマパーラ日記の成立は先行研究が仮定するような単純なものではなく、次のような6種の異本がある、もしくはあったと推察される。

- ① 手書原本:スリランカ国立資料館所蔵。1890年をふくむ幾つかの巻で欠巻があると推察される
- ② 手書原本マイクロフィルム版:スリランカ国立資料館所蔵。1990年代後半に撮影されたものと推測される。欠巻の状況は手書原本に同じ
- ③ 手書原本電子複写版:ダルマパーラ財団所蔵。21世紀に入ってから作成される。複写元が手書原本か手書原本マイクロフィルム版かは不明であるが、前者の可能性が高い。1890年のみならずタイプライタ版が補完する多くの巻に欠巻あり
- ④ 文字起こし版: 抄録日記掲載のために 1940 年代に作られる。初期の日記の部分のみ? 手書きであったかタイプ打ちであったかは不明。所在不明
- ⑤ 抄録日記:1944年より断続的に大菩提会機関誌に掲載。文字起こし版をもとにして抜粋された
- ⑥ タイプライタ版:1960年代にダルマパーラ財団評議会の決定により作成された私家版。初期の日記の部分は文字起こし版を再録し、残余は独自に文字起こしを行いタイプ打ちする。スリランカ国立資料館とダルマパーラ財団に1部ずつ所蔵。最低9年分の欠本あり

このうち④は先行研究に報告なくあくまで想定上のものであるが、この介在を考慮に入れた方が ⑥の成立過程を説明しやすい。40~60年代の大菩提会関係資料を精査すれば存在が確認できる可 能性がある。

#### 7. ダルマパーラ日記の資料的価値

前述のように今回の調査には時間的制約があったためダルマパーラ日記の全貌を精査するまでには至らなかったが、筆者が調査した数年分に限定しても手書原本の経年劣化が激しいことは確認できた。これがどのような状態で国立文書館に保管されているかは不明だが、マイクロフィルム版もしくは電子複写版をベースに光学処理を施して可読性を高め、学術資料として活用できるものとする必要があることは改めて指摘するまでもない。

手書原本の劣化状況および想定される欠巻を埋めるものとしてタイプライタ版を活用することはすぐれて有効だが、書誌学的批判に堪えうる校定が行われておらず、学術資料として用いるのには不十分である。転写の原則や削除部分を考察し、異本間の異同を明白にする正しい校本の確立が急務である。これらを経たうえでダルマパーラ日記を電子化し公開すれば、今後の研究にとって資するところはきわめて大きいと言える。

筆者が現在研究中の日印文化交流の分野に限定しても、今回調査の対象とした 1889、1893、1902 の 3 年の巻は、ダルマパーラの日本における活動やそこで培われた主に仏教関係者との交友がいかにしてその後も継続されたかを検討するにあたって、同時代の邦文資料の精度やそこに見られる文化的バイアスを日記という一次資料から対照して検証できるという意味で、資料的価値がきわめて高い。これ以外にも、4 回目の最後の来日にあたる 1913 年や、1902 年からこの年に至る日記は、1903 年に日本で創立された日印協会の初期のインドにおける活動をインド側の視点から再確認しうるという観点から、きわめて興味深い資料となりうる。ダルマパーラ日記が学術資料として確立されることが強く望まれるゆえんである。

#### 謝辞

本論文は共同研究者である岡崎秀紀・中村元記念館研究員による事前調査に大きく負うている。本研究着手の動機となった重要な情報、すなわち日記原本の電子複写版がダルマパーラ財団に所蔵されていることおよび大菩提会機関誌に抄録日記が掲載されていたことは同研究員の報告によるものであり、それなくして本研究の進展がなかったことを明記して謝意を表したい。また現地調査に当っては多くの人々の協力を得たが、なかでもダルマパーラ財団のニハル・ウェーラシンハ代表、スリランカ大菩提会会長バーナガラ・ウパティッサ師には多大の便宜を図っていただいた。感謝申し上げる。研究資金の面では神戸学院大学人文学部研究推進費を拠出して下さった神戸学院大学人文学部長・寺嶋秀明教授、アダヤールの神智学協会での調査費を充当していただいた科研費 B 「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究 ―― 東西融和と民主主義の相克 ――」(研究課題番号:26284054)の代表である多摩美術大学の安藤礼二准教授に大きく負うている。ここに明記して感謝したい。またアーカイヴ学の専門用語に関しては株式会社 DIS 代表の橋本費氏から有益な助言を得た。付して感謝申し上げる。

(本研究は2015年度神戸学院大学人文学部研究推進費を受けたものである)



図1 手書原本電子複写版を収録した CD (2015年8 月3日筆者撮影)



図2 タイプライタ版の黄表紙本と黒表紙本(2015 年8月5日筆者撮影)

表1 ダルマパーラ財団所蔵のダルマパーラ日記

年	表 1 ダルマパーラ貝タイプライタ版	オ団所蔵のダルマパーラ 	CD 巻数
1889		\	CD2
1890			
1891			CD3
1892	√		
1893			
1894	√		
1895			
1896	√		
1897			
1898			
1899	$\sqrt{}$		
1900			CD1
1901	√ -		
1902	√		
1903	√		
1904	√		
1905	$\sqrt{}$		
1906	$\sqrt{}$		
1907	$\sqrt{}$		
1908	√ √		
1909	√		
1910			
1911	$\sqrt{\kappa}$	$\sqrt{}$	CD1
1912			CD1
1913		$\sqrt{}$	CD1
1914			
1915		√	CD1
1916			CD1
1917		√	CD1, CD2
1918	$\sqrt{}$		
1919	$\sqrt{}$	√	CD1, CD2
1920	√		
1921	√		
1922		$\sqrt{}$	CD3
1923			
1924	<u>√</u>		
1925	√		
1926	√		
1927	$\sqrt{}$		
1928			
1929			
1930			
1931			CD0
1932		<u> </u>	CD2

※タイプライタ版 1910、1911 年は合本

# Faculty Bulletin Humanities and Sciences

Number 36 March	March 2016	
CONTENTS		
Yukio Inui A generalization of a certain mathematical problem	1	
Iwao Yajima History and present state of old Igawa Horiwari irrigation canal	7	
Toshio Akai A Note on Dharmapala Diary, the Development of its Alternative Versions and its Documentary Value	25	
Xu Shihong, Yoshimichi Ohara Historical Studies and Digitized Material in China	35	
Shunji Kumata On Vocatives	45	
Margret Buerschaper, Kenji Takeda Die Anthologie der Deutschen Haiku von Heute: von dem Anfängen bis 1990 (Nr. 2)	57	
Hiroki Hasegawa Enigma of Kaicho-on	75	
Mizuмото Hironori  The List of the Earthquake Materials that had been Stored in Kobe, Daichi Elementary	87	
Kim Ikkyon The changes in "Kashima Sangyo"in the hypocenter (Nagasaki) near	129	
Michael Greisamer Prelude to Kobe College	145	
Yoshiyasu Matsui Spell of Life	155	
Hiroyuki Shimizu, Makiko Yuasa Investigating Childhood Autobiographical Memories of Visiting Science Museums Using the Memory Characteristics Questionnaire (MCQ): An Analysis of Emotional Affect among Museum Staffs, University Students, and Older Adults	167	
Kae Kokubo Cognitive dysfunction and behavioral disorder after damage to the basal ganglia	183	
Kinuko Yoshino, Kunihiro Hasegawa, Mayuko Hori, Mutsumi Mitsunami, Shota Ogawa, Xinhua Mao, Ai Namba, Michiko Sorama, Kyoko Yamamoto, Akiko Doi, Yuki Dojo, Kae Kokubo, Shizuyo Maeda, Eiko Yamagami, Manabu Akiyama, Chihiro Hasegawa, Nobutsugu Hirono, Junichi Ishizaki, Tadashi Koyama, Chitoku Miwa, Hiroyuki Shimizu  The Present State and Perspectives on Education of Psychology in Department of		
Human Psychology, Kobe Gakuin University (10)	191	
Ai Namba, Kazuki Togo, Naoya Iwata, Shinji Ono, Tomokazu Shinga, Kanami Wakihara, Yayoi Yamashita The Research Report 5 on the Accommodation Programs for Non-attendance Children and Family:		
A Consideration of Parents and Children's Survey	209	

# Faculty of Humanities and Sciences KOBE GAKUIN UNIVERSI

Kobe, Japan